

社会的ひきこもり者の家族を対象とした支援モデル 作成に向けた臨床心理学的研究

久保, 浩明

<https://hdl.handle.net/2324/4784380>

出版情報：九州大学, 2021, 博士 (心理学), 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (2)

氏名	久保 浩明			
論文名	社会的ひきこもり者の家族を対象とした支援モデル作成に向けた臨床心理学的研究			
論文調査委員	主査	九州大学大学院人間環境学研究院	教授	黒木俊秀
	副査	九州大学大学院人間環境学研究院	教授	増田健太郎
	副査	九州大学大学院人間環境学研究院	准教授	古賀 聡
	副査	九州大学大学院人間環境学研究院	教授	中村知靖

論文審査の結果の要旨

本研究の目的は、社会的ひきこもり(以下、ひきこもり)の家族支援としてメンタルヘルス・ファーストエイド(Mental Health First Aid: MHFA)およびコミュニティ強化と家族訓練(Community Reinforcement and Family Training: CRAFT)に基づく家族介入プログラムの開発により、ひきこもり者の家族支援のモデルを提示することにある。

第1章ではひきこもり支援を概観した。ひきこもり事例では家族支援の重要性が高く、家族の困難感を整理したところ家族の高い心理的負担、家族機能および家族関係の課題、スティグマが見出された。これらの困難感に対する家族支援のシステムティックレビューを実施した結果、支援の一定の有効性が認められたが、スティグマへの介入は十分に検討されず、包括的な家族支援が求められると考えられた。

第2章では本研究の目的として、スティグマの低減に有効性が示されているMHFAおよびひきこもり者の家族支援に一定の有効性が示されているCRAFTに基づく集団形式の家族介入プログラムを開発し、家族の困難感に対する包括的な支援の有効性と課題を検証することで、ひきこもり者の家族支援モデルを実証的に構築することを提示した。

第3章では研究1から研究3を通じて家族プログラムを開発した。研究1では全5回のセッションから構成される5回版プログラムを開発した結果、MHFAの対応スキルとスティグマが改善したが、対応する自信は変化しなかった。家族のストレス反応は短期的改善が示唆された。また、ひきこもり者の過半数が外出の増加等の行動変化を示し、専門家支援の利用や就職活動等の社会参加に関連する行動を示した者もいた。研究2では5回版プログラムと同内容を1日で実施する1日版プログラムを少数の家族に実施したが、MHFAの対応スキルやスティグマは改善せず、対応する自信が低下した一方で、家族のメンタルヘルスは改善した。研究1および研究2から参加者の多様性が示唆され、研究3では多様な状況に応じて家族が段階的に関わるスモールステップアプローチを導入し、全3回のセッションから成る3回版プログラムへと改訂した。その結果、MHFAの対応スキルが短期的に向上したが、スティグマは変化せず、対応する自信は低下したが、家族のメンタルヘルスは短期的に改善した。ひきこもり者の70%に行動変化がみられ、一部は社会参加に関連する行動を認めたが、問題行動が増加した者もいた。以上のように、3回版プログラムのひきこもり者の行動変化率は5回版プログラムと同等以上であり、有用な家族支援の選択肢と考えられる。また、スモールステップアプローチの有効性が示唆されたが、プログラム後の家族の変化とひきこもり者の行動変化との関連を十分に検討できなかった。

そこで、第4章ではひきこもり者の家族支援モデル作成に向けた示唆を得るために、ひきこもり

者の行動変化の要因を量的および質的手法を用いて探索的に検討した。研究4では全参加家族の自記式調査票を用いてロジスティック回帰分析を実施した。その結果、家族のメンタルヘルスの改善とひきこもり者に対する日常生活行動の積み重ねがひきこもり者の行動変化に影響することが見出された。また、ひきこもり者に関わる困難感や葛藤に家族が向き合うことが変化をもたらす可能性が示唆された。研究5では全参加家族の自由記述を用いてテキストマイニングを実施した結果、傾聴などのひきこもり者本人のペースを受容する関わりの有用性が見出された。また、専門家支援を促す関わりは個別支援の中で実施すること、支援の様々な段階で家族支援を継続する重要性、家族自身のセルフヘルプが家族支援に求められることを論じた。研究6では7例の事例報告を通じて家族の変化のプロセスを検討した結果、ひきこもり者本人のペースを受容する関わりの有用性が改めて支持され、こうした関わりがひきこもり者と家族が話し合える関係性につながる可能性が見出された。また、スティグマの問題に対して、MHFAに基づく関わりの有効性が確認された。さらに、ひきこもり者への関わりを阻害する家族自身の不安等の課題についても検討し、こうした課題を有する家族は回数が限定される集団形式の支援ではなく、集団形式の支援と個別支援とを組み合わせた支援が有用である可能性を考察した。

第5章では研究1から研究6に関する総合考察を行い、ひきこもり者の家族支援モデルを提示した。本研究の支援モデルではセルフヘルプによって家族が関わる余裕を得たうえで、ひきこもり者本人のペースを受容する関わりや家族の日常生活の関わりを積み重ね、家族関係を改善する支援を集団的支援の構造で実施し、専門家支援の利用を個別支援の中で検討する家族支援の手法を実証的に提示した。

以上のように、本研究は、社会問題として注目されるひきこもりに対する支援において、メンタルヘルスとスティグマの問題に着目したひきこもり者の家族介入の手法とその効果を実証的に検証したもので、根拠に基づくひきこもり者の家族支援の確立に資する成果を挙げた点で、臨床心理学的意義が大きい。

よって、本論文は博士（心理学）の学位に値するものと認める。